

その崖の上は、毎日が生きる闘いでした。



牧師と

A Step Forward

いのちの崖

風光明媚な観光名所、三段壁。
美しい断崖は、自殺の名所としても知られていた。
人生に絶望した自殺志願者と共に暮らす牧師。
彼らの日々が問いかける“生きる意味”とは？

加瀬澤充 監督作品

監督・撮影・編集：加瀬澤充 プロデューサー：煙草谷有希子 音響：菊池信之 音響助手：近藤崇生

宣伝協力：細谷隆広 宣伝デザイン：成瀬慧 製作・配給・宣伝：ドキュメンタリージャパン、加瀬澤充

助成：文化庁文化芸術振興費補助金（映画創造活動支援事業）
文化庁 独立行政法人 日本芸術文化振興会

2018年 | 100分 | カラー | 英題：A Step Forward

www.bokushitogake.com



僕が今日死のうが、明日死のうが、誰も気にしないだろ
うってリアルな確信を持つ
ちやったんですよ

ものすごい寂しさが湧いてき
て、寂しくて、寂しくて、寂し
くて……急に誰かの声が聞き
たくなって、いのちの電話をか
けました
死にに来たんですけど、
できなくて……
助けてください、
助けてください……

“生きていてもしょうがない” “ずっと孤独を感じて生きてきた” —— 悲痛な想いで、観光名所・三段壁を訪れる自殺志願者たちの姿。

和歌山県白浜町にある観光名所・三段壁で、「いのちの電話」を運営している牧師・藤藪庸一。映画は自殺志願者たちを死の淵から救い、生活再建を目指して共同生活をおくるという独自の取り組みに密着した——。藤藪は、人生に絶望してやってきた自殺志願者の声に耳を傾け、借金や人間関係のトラブル、精神的な病など様々な問題を抱え、帰る場所のない人々に教会を解放し、共に暮らしながら、生きていく方法を探していく。日本全国の自殺者数は年間2万1321人(2017年)。1日あたり60人近い方が亡くなっている計算になる。厚生労働省の「自殺対策白書」では、15歳～39歳の各年代の死因の第一位が自殺となっており、大きな問題となっている。牧師・藤藪が地道に続ける「いのちの電話」は自殺を思いとどまらせる、最後の砦として存在している。



何度失敗しても、帰ってこられる場所として。

藤藪は共同生活の場を提供するだけでなく、弁当配達を行う食堂も運営している。そこは、ひとり孤独にやってきた人々が、経験のない調理を学び、同じような経験を持つ仲間と共に、もう一度人生を取り戻したいと働いている。藤藪と彼らの対話から見えてくるのは日本の様々な問題だ。若者たちの低い生への肯定感、コミュニケーション不全、希薄な人間関係……。“何度でも帰ってこられる場所になるといい……”そう語る藤藪に共感し、中には受洗する者もいるという。ただ、その場所は決して甘えるだけの場所ではない。親以上に厳しく、現実と向き合うことを求められることもある。心優しくも厳しい牧師と自殺未遂を経験した仲間たちの共同生活には、お互いに支え合う人々の物語があった。自殺問題の水際を見つめたドキュメンタリーは、社会に、そしてあなたに、何を訴えかけるのだろうか？



www.bokushitogake.com

2019年1月、ロードショー

全国共通特別鑑賞券 ¥1,300 発売中
当日一般 ¥1,700 / 大・専・シニア ¥1,200 (全て税込)

JR総武線・都営地下鉄大江戸線東中野駅より徒歩1分
ポレポレ東中野
03(3371)0088
www.mmjp.or.jp/pole2/

